



# 弘前大学同窓会報

## 第25号

発行日 令和6年3月31日  
発行者 弘前大学同窓会  
題字 吉田 豊 元学長



**会長就任にあたっての抱負と  
新たな同窓会事業への期待**  
同窓会会長 高谷 清孝

令和5年5月20日の理事会において任期満了に伴う役員改選が行われ、相馬正栄前会長の後任として新会長に選任された農学生命科学部同窓会長の高谷清孝です。理事としての経験がそれほど長いわけでもなく、降って湧いたような会長就任となり不安で一杯ではありますが、誠心誠意務めて参りますのでよろしくお願いいたします。

初めに自己紹介をさせていただきますが、私は、昭和34年5月生まれの64歳で、弘前市に住んでいます。昭和53年に当時の農学部に入學し、昭和57年に卒業いたしました。その後、青森県庁に38年間勤務して定年退職し、現在は、県出資法人の一つである公益社団法人あおもり農業支援センターに勤務しております。

また在学中は、相馬前会長と同じ全学サッカー部に所属し、学園町のぬかるむグラウンドで泥まみれになって試合をしたことや、「春は桜の弘前城」で始まる部歌を全員で輪になって肩を組みながら歌ったことなどが懐かしい思い出です。

さて、弘前大学同窓会は、各学部同窓会が密接な連携の下に、相互の啓発を行い、大学の教育研究活動の支援を行うことにより、学部同窓会及び大学の発展に寄与することを目的に平成11年6月に設立されました。現在の主な活動内容は、年1回の会報発行や記念行事への支援などであり、その財源は、各学部同窓会からの負担金で賄われています。

こうした中、今般、弘前大学では、「学生の愛校心醸成」と「卒業生とのネットワーク強化」を図ることを目的に「弘前大学校愛会事業」を創設し、令和6年度から本格スタートさせることとしています。

本事業では、大学が新たな寄附金制度を設置し、卒業生に対して大学への寄附金納入をお願いする一方で、学部同窓会の活動等をサポートする仕組みとなっており、会費収入の落込みなどから厳しい財政運営を強いられている学部同窓会にとっては、大学から支援を受けることで計画的かつ安定的に活動を続けることができます。

令和6年度は、一部の学部同窓会が本事業に参画する予定としておりますが、大学と学部同窓会が協力し合いながら卒業生との連携強化に取り組んでいくことで、学部同窓会の活性化にも繋がるものと期待しております。

長らく続いてきたコロナ禍ですが、ここに来てようやく沈静化の動きが広がってきました。それに伴い、さまざまな行事が数年振りに再開され、また、その方法もコロナ前に戻りつつあります。大学同窓会といたしましては、こうした動きも見据えながら、弘前大学の発展に寄与するため何をすべきかを理事会等で検討し、一丸となって取り組んで参りますので、ご支援を賜りますようお願い申し上げます。



**弘前大学を、共にさらに前へ**  
弘前大学長 福田 眞作

私の学長任期（1期4年）も残すところ3ヵ月となりました。令和2年の就任直後からコロナ禍への対応に追われた1期目でしたが、「学生の学びと生活を保障しつつ、教育・研究、医療、そして地域貢献の歩みを止めてはならない」の決意の下、大学の管理・運営に取り組んだ4年間でした。未知の感染症を前に、冷静かつ的確な判断・決定を下すことができたのは、教職員の皆さんのご協力とご理解、そして地域の方々と同窓生の皆さんからの激励のお言葉とご支援があったからこそだと、改めて回顧しています。まずは、すべての皆さんに感謝を申し上げます。本当にありがとうございました。

さて、任期4年目の令和5年度は、本学にとって多方面で飛躍の年ではありましたが、一方で更なる改革・改善を求められた年でもありました。令和4年度に採択された文部科学省・国立研究開発法人科学技術振興機構（JST）による共創の場形成支援プログラム（COI-NEXT）：「健康を基軸とした経済発展モデルと全世代アプローチでつくるwell-being地域社会共創拠点」事業を基盤として、昨年度から始まった国の大型プロジェクトである「地域中核・特色ある研究大学の振興事業」に挑戦し、見事に「地域中核・特色ある研究大学の連携による産学官連携・共同研究の施設整備事業（ハード）」に採択されました。医学部敷地内に「データヘルス社会実装研究セン

ター（地上4F）」が誕生します。残念ながら、「地域中核・特色ある研究大学促進事業（ソフト）」の採択には届きませんでした。弘前大学全体の組織改革と研究力のさらなる強化を図り、次年度の採択を目指してまいります。

令和5年9月末に、「第3回弘大卒業生の集い in 東京」を開催し、17名の卒業生に参加いただきました。平成30年に始めた企画ですが対面開催は2回目となります。コロナ禍に同窓生から寄せられた意見と同様、「卒業生間の交流をもっと深めたい」、「母校の現状を知る機会がほとんどない」という意見をいただきました。そのような同窓生の声に応えるために、春から学生・卒業生と母校のネットワーク形成事業（校愛会）をスタートいたします。大学同窓会や各学部の同窓会と連携しながら、弘前大学在籍生・同窓生による全国ネットワークの構築を目指してまいります。全国の各地域・各組織の同窓生の皆さんには、是非ともご入会をお願いいたします。

令和5年11月末の学長選考・監事会議の最終選考において、次期学長候補者に選出いただきました。次の4年間もまた、すべてのステークホルダーの皆さんと一緒に、弘前大学および地域が抱える課題を解決するための取組・事業に挑戦してまいります。同窓会の皆様方には、引き続きのご支援を賜りますようお願い申し上げます。

### 第3回 弘大卒業生の集いについて

弘前大学東京事務所は、主に首都圏における研究紹介、技術相談、産学官連携などの活動拠点であり、4名の職員が常駐しています。また、卒業生の連携強化を目的とした「弘大卒業生の集い」を運営しており、弘大トピックスの発信、ネットワーク構築の一助となる場を提供しております。

2023年9月30日（土）に学術総合センター（東京都）において、第3回「弘大卒業生の集い」を開催し、17名の卒業生に参加いただきました。本会では、福田学長から開会挨拶をいただき、続いて大学側出席者の紹介、曾我研究担当理事・副学長・東京事務所長から弘前大学の近況報告として、近年の弘前大学の様子や

研究成果、地域貢献活動やコロナ禍での学生支援などを紹介しました。その後、卒業生から自己紹介をいただき、集合写真の記念撮影のち、参加者で交流を行いました。交流タイムには、スライドで流れる大学の写真を背景に参加者の皆さまが世代や学部を超えて終始和やかな雰囲気の中で懇談し、若林企画担当理事・副学長からの閉会の挨拶をもって名残惜しくも盛会裏に終えることができました。

「弘大卒業生の集い」は、今後も継続的に開催したいと思いますので、これから就職される卒業予定者、ネットワークを構築したい卒業生など身近にいらっしゃいましたら、お誘い合わせのうえ、是非ともお気軽

にご参加ください。

また、Facebook、X（旧Twitter）も開設しておりますので興味があればそちらも併せてご利用ください。首都圏在住の方や東京にお越しの際は、事務所への訪問もお待ちしております。



集合写真



福田学長による開会挨拶



曾我所長による近況報告の様子



若林理事による閉会の挨拶



交流タイムの様子

登録フォーム



【東京事務所HP】

<https://jtokyo.hirosaki-u.ac.jp/>

【卒業生の集い】

<https://jtokyo.hirosaki-u.ac.jp/tsudoi>

### 弘大生の就職状況

キャリアセンターでは、学生の就職相談をはじめ、就職ガイダンスや学内企業説明会の実施など、様々な就職支援を行っています。令和5年3月卒業者の就職状況は、前年度に続き新型コロナウイルス感染症の影響がある中、歴代4位の98.6%（対前年度比0.5ポイント増）となり、コロナ禍前の水準に回復しました。

就職先の状況は、青森県内就職者が全就職者885人のうち231人(26.1%)、次いで北海道が178人(20.1%)となっています。

昨年度と比べて青森県内就職率が4.7ポイント減った一方で、北海道、

## キャリアセンターから

岩手県、宮城県は1.2～1.8ポイント増えました。青森県内就職率減少の要因は、青森県内出身学生が前年度より減ったことです。青森県出身学生の県内定着率はここ数年約60%で横ばいで、今回の減少は一時的なものと考えています。

大学院等への進学者は、全学部で増え257人（前年度247人+4.0%）でした。医学部医学科を除く卒業生数(1,215人)に対する割合は対前年度比0.5ポイント増、過去最高の21.2%となりました。更なる専門性修得を求める学生のニーズの高まりが影響

したものと考えられます。

### 業界研究・企業等研究への支援

キャリアセンターでは、学生の皆さんに職業観や就業機会を考え、業界や企業を理解し、その魅力を知ってもらう目的でキャリア教育の一環として企業等見学会のバスツアーを実施しています。今年度は9月末週に、弘前地区・青森地区・八戸地区の3コースで実施しました。生協食堂スペースへのチラシ貼り出し等で学生に周知し、募集人数を超える学生の参加申し込みがありました。食品加工、機器製造、通信、運輸、医療等の分野で活躍されている企業その他、青森県庁や弘前市役所と併せ、計11の企業等を見学しました。

参加学生からは「希望している業種以外の業種も知ることができ、自分の視野を広げられた」、「実際に先輩社員の話を聞いて社会人としての

イメージがもてた」などの反響があり、本企画が学生の視野を広げる良い機会となったと感じられます。

来年度以降の企画でも工夫を凝らし、学生の自己分析や業界研究につながるツアーを企画します。

### 価値ある大学 2022-2023 就職力ランキングで高い評価

本学は令和4年5月発刊の『日経キャリアマガジン特別編集 価値ある大学2022-2023就職力ランキング』（日経 HP）で「地域の活性化に貢献している大学部門」全国1位、「就職支援に熱心に取り組んでいる大学部門」全国2位にランクされました。これも弘前大学卒業生皆様のご活躍の賜物と感謝申し上げます。

キャリアセンターでは職員一丸となって今後も高い評価を維持できるよう、学生のキャリア教育や就職支援の充実に取り組んでまいります。同窓生の皆さまからも学生へのご支援をいただければ幸甚に存じます。

## 医学部保健学科通信

### 医療の新たなステージへ

保健学科検査技術科学専攻 准教授  
**千葉 満**  
(平成17年 保健学科卒)

コロナ禍による社会の混乱からまもなく3年ほど経過しようとしています。当時は感染予防の点から接触制限があり、現在は当たり前になっていますが、オンラインによる授業や会議はほとんど経験したことがなかったため、教育をする立場として大変苦慮しました。特に実習科目については実際に手を動かして医療行為を学ぶ必要があるため、オンラインで実習を成り立たせることにはかなりの困難がありました。コロナ禍が落ち着いてから追加の実習などを行い、当時在学していた学生をなんとか卒業・国家試験合格させることができました。

まだコロナ禍の余韻が残るなか、2021年10月に医師の業務を軽減するためのタスクシフト・シェアに関する法律が制定されました。医療現場

において多忙な医師の業務のうち比較的安全性の高い医療行為を看護師、診療放射線技師、臨床検査技師などコメディカルスタッフも実施できるようになりました。それに併せて教育カリキュラムの変更があり、私が在籍している検査技術科学専攻では臨床検査技師の新たな教育内容として医療安全管理学を強化することとなりました。これまで臨床検査技師は採血を行うことができましたが、新たに静脈路確保とそれに伴う造影剤注入を行うことができるようになりました。そのほかには経口・経鼻・気管切開カニューレからの喀痰吸引、持続皮下グルコース測定、肛門内圧測定、消化管内視鏡検査による組織検体の採取なども行うことができるようになりました。

遡って2015年には微生物学的検査の検体採取として鼻腔・咽頭・皮膚・口腔・肛門から検体採取することができるよう業務拡大があり、臨床検査技師の活躍の場が広がっております。次世代の医療従事者を育てられるよう教育に努めてまいります。

## 弘大生協は創立60周年を迎えました

弘前大学生協 専務理事 上遠野 泰

学生・教職員組合員の皆様に支えられて、弘大生協は2023年で創立60周年を迎えました。長きにわたり、諸先輩方をはじめ多くの方のご利用とご支援に感謝申し上げます。

2020年に始まったコロナ禍の影響で、学生の生活スタイルも大きく変化しました。徐々に課外活動や留学・旅行などが回復しつつあるものの、経済的に厳しい学生も多く、また一人で過ごす時間が増えた学生の「こころ」の問題も大きな課題となっています。コロナ禍以前の状態には戻らないことを前提として、学生に寄り添った弘大生協らしい事業を今後も行って参ります。

創立60周年を記念して、「弘大と弘大生協のアピール」を目的とした広報企画と、「学生の経済支援」を目的に生協電子マネー Picoのポイント付与を中心とした組合員還元企画を行いましたので、ご紹介します。

- ①『弘大と弘大生協の今と昔』と題した写真コンテスト
- ②弘大・弘大生協に関する亚克力キーホルダー販売（ガチャマシンで販売）
- ③創立60周年記念誌発行
- ④食堂Horest(ホレスト) / Scorum(スコラム)での夕・朝食ご利用時の60ポイント付与
- ⑤Picoへの現金チャージ時の6%ポイント付与

## 理工学部通信



理工学研究科長  
**岡崎 雅明**

令和4年3月から理工学研究科長を担当しております岡崎雅明です。

高等学校の化学の教科書では、物質は無機物質と有機化合物の2種類に分類されておりますが、私はその境界領域の化合物群を対象とした有機金属化学を専門にしております。

平成21年11月に弘前大学に着任しました。着任以降、理工学部・理工学研究科の学生に感じている特性は、先入観にとらわれない、自由な発想に基づくアプローチ力と地頭の強さにあると考えています。新しい発見に対して素直に心から感動し面白いと感じることができ、問題解決に向けてとことん粘り強く考え抜くことができる地頭の強さが、本学の学生の持ち味です。現代では、課題を自ら設定し、ゼロからイチを生み出すことができる研究者・技術者が求められており、我々が指導する学

生の特性に合致していると私は考えています。このような特性は大学だけでは養うことはできず、中学校および高等学校での教育が極めて重要です。このような観点から、人文社会科学部と理工学部の合冊版として、「教員という選択」という冊子を令和4年度末に刊行させていただきました。多くの同窓の中学校および高校教員の方々に、教員を目指す学生に対して、メッセージ性のある原稿をご寄稿いただき、ありがとうございました。中等教育における教員養成を理工学部・理工学研究科の重要なミッションとして位置づけ、取り組んで参ります。

理工学研究科ではここ最近、環境・エネルギー分野において、2件の共同研究講座を設置させていただきました。共同研究講座とは、企業等から資金を提供いただき、弘前大学内に設置する研究組織で、本学のシーズを基に社会実装につなげていく上で重要です。今後は他部局とも連携を強化して、本学の看板分野へと育てていきたいと考えております。

## 農学生命科学部通信

### 白神山地世界自然遺産登録から30年

白神自然環境研究センター長  
**中村 剛之**  
(平成3年 理学部卒)

白神山地が屋久島とともにUNESCOの世界自然遺産に国内で初めて登録されてから、2023年で30年が経ちました。県や周辺自治体ではこの節目を記念した様々な行事が行われています。白神自然環境研究センターでは、白神山地の自然の現状を記録する目的で県内の自然愛好団体の協力のもと、この地域の生物多様性について総合的な調査を実施しました。主な調査地である鱈ヶ沢町黒森の「白神の森遊山道」を繰り返し訪れ、植物、キノコ、昆虫などの調査と標本収集を行いました。また、6月には子どもたちを含めた一般の市民と専門家が一緒に生物調査を行うイベント「白神バイオブリッツ」を開催しました。日本各地から100名を超える参加者が集まり、24時間をかけて集中的に自然を探求する活動に取

り組みました。これらの調査の結果、コウチュウ目、ハチ目、ハエ目などにおいて、いくつもの初記録種や未記載種が確認され、これまで知られていなかった生物の多様性が明らかになりつつあります。

このように、豊かな自然が残る白神山地ですが、その生態系は決して不変のものではなく、現在、急激な変化にさらされています。例えば、30年前には白神山地に分布していなかったヤマトシジミやクロアゲハなどの蝶類の定着が今回の調査でも確認されました。このような地球温暖化による南方系動植物の分布北上、様々な外来生物やニホンジカの侵入と定着は、今後白神山地の姿を大きく変えてしまうに違いありません。

時々の変化を捉え、科学的な見地から希少生物の保護や環境保全を有効に行うためには、綿密な現地調査によって得られる生物や環境の情報が必要不可欠です。白神自然環境研究センターではこれからも、野外での調査と標本資料の収集を継続して行っています。

### 弘前大学札幌サテライト設置について

弘前大学では、令和5年4月、札幌市に「弘前大学札幌サテライト」を設置しました。場所は、JR札幌駅南口を出て徒歩5分の「アスティ45」12階で、職員は常駐せず、シェアオフィス（月に数回空いている部屋を利用）の形態を取っており、本学の事業イベントや企業等との打ち合わせ等で利用する際に弘前から職員が出向いて利用しています。



札幌サテライト（アスティ45）

これまで、北海道からの志願者確保の観点から、北海道内各地での入学説明会・相談会への参加、そして、高校へ出向いての模擬講義や大学紹介

などを行っているほか、10数年前からは個別学力検査（一般選抜前期日程）において、札幌地区試験場を設け、受験生の移動の負担軽減を図っているところです。

本学への入学者の都道府県割合は、青森県出身者が全体の約40%を占める中、次いで北海道出身者が約25%前後となっています。

さらに、卒業生については、毎年200名程が北海道内へ就職しており、様々な業種、分野で活躍されています。北海道内の自治体及び企業から、卒業生の評価は高く、弘大生への期待の声も多く聞かれます。また、出身地である北海道での就職を希望する学生もさらに増えていくことが想定されています。

このような状況の下、札幌サテライトは、これまでの入試広報活動に加え、学生への就職支援及び北海道

内自治体・企業との交流の強化、ご支援いただいている北海道在住の卒業生とのネットワークの構築を進めることを目的としております。

設置初年度の大きな事業として、令和5年7月に設置記念講演会を開催し、北海道内高等学校、自治体及び経済団体・企業関係者、本学卒業生など多くの皆様に参加いただきました。当日は、郡千寿子理事（教育担当）・副学長・札幌サテライト室長及び各学部長等から本学の概要、教育・研究の取り組み、学生支援の説明を行い、これまでのご支援に対する感謝と北海道との結びつきをアピールしました。また、堀内大輝さ

ん（北海道放送アナウンサー、平成27年理工学部卒）へ弘前大学応援大使第1号の任命式も行われました。

北海道での拠点として札幌サテライトを活用し、これまで以上に本学の魅力を伝え、北海道の方々に愛される弘前大学を目指したいと思っております。（学務部入試課）



札幌サテライト設置記念講演会

### 教育学部通信



教育学部准教授  
佐藤 剛  
(平成15年 教育学部卒)

教育学部の教員として学生から教員採用試験の指導をお願いされることがあります。その時、よく問う質問である「なぜあなたは教員になりたいのですか?」について、多くの学生は「お世話になった担任の先生の影響です」や「中学校の英語の先生の授業が楽しかったからです」のように回答します。それを聞きながら、後進がしっかり育っていることに喜びを感じると同時に、現場で日々頑張っておられる先生方が児童・生徒にとってかっこいい憧れの存在であるおかげなのだと思っております。

僕自身も教員を目指したのは、同じく弘前大学教育学部を卒業し中学校の英語教師であった父の影響です。幼い頃、近所を父と散歩していると、部活帰りの中学生が「先生こんにちは!」とあいさつをしてくて、それ

に「おう!」と応える父の姿は、当時の僕にはとてもかっこよく、そして一緒にいる自分まで誇らしくなったものでした。バレンタインデーには生徒からもらったチョコレートをたくさん持って帰ってくることも、うらやましく、誇らしいものでした。

近年、教員の労働環境の過酷さが「ブラック」と取りざたされ、高い志をもって教育学部に入学してきた学生でさえ教員としてやっつけられるのか不安に思うことが少なくないようです。部活の地域移行や勤務時間の短縮など、負担軽減のための制度上の改善の必要性ばかりが議論されていますが、教員になりたいと多くの若者たちに思ってもらうためには、何より児童や生徒の前に立つひとりひとりの教員が、目の前の子どもたちにとってかっこいい憧れの存在であることが第一なのではないでしょうか。大学で教員養成に携わる立場にある僕自身も、教員を目指し日々勉強している教育学部の学生たちにとって、かっこいい憧れの存在のひとりでありたいと思います。

- ⑥ 食堂Pomme(ポム)セットメニュー グランプリ獲得「豚キムチ丼セット」ご利用時の60ポイント付与
- ⑦ コンビニCerisier(サリジェ)でのおやつ・デザート商品ご利用時の60ポイント付与
- ⑧ 書籍複数冊を同時購入時の6%ポイント付与
- ⑨ たびshop商品「フィリピン異文化渡航ツアー」の参加渡航費の一部補助



写真コンテストの案内ポスター



アクリルキーホルダー販売のガチャマシン



アクリルキーホルダー「Scorum カレー」



夕食ご利用時60ポイント付与の案内ポスター



「フィリピン異文化渡航ツアー」のひとこま



食堂の人気メニュー「鮭丼」



コンビニの人気メニュー「焼き芋」

### 人文社会科学部通信

人文社会科学部同窓会 会長  
森岡 欽吾  
(平成4年 人文学部人文科学卒)

令和5年6月に開催された学部同窓会総会で、建部礼仁前会長の後を引き継ぐことになりました平成4年卒業の森岡欽吾です。

歴代の会長をはじめ、同窓会の役員を素晴らしい方々が務められている中で、学生時代の素行も決して褒められたものではなく、今でも至らない自分が会長を引き受けることには、とてもとても大きな違和感がありましたが、敬愛する大先輩から放たれた矢をかわすこともできず、運命のいたずらか（大先輩のいたずらか）、このような次第になってしまいましたので、次の方へバトンをおつなぎするまでの間、皆様のお力添えを賜りますよう、何卒よろしくお願いたします。

学生時代の自分は、哲学などを学ぶ人文基礎コースに所属し、中世の哲学者トマス・アクィナスをもじっ

た「トマト・秋ナス・ピザ」を学園祭で焼いたり、ギリシア哲学を専攻したりしておりましたが、早々にギリシア語で人生何度目かの挫折をし、好きな本を読んだりギターを弾いたり、キラキラした日々を過ごしていたため、当然のごとくなかなか単位が取れず、心の広い先生の授業のおかげで何とか卒業ができた、という話を言い訳のように同窓会の懇親会で話すと、悪い成績の自慢話で場が大いに盛り上がり、失敗した経験もどこかで役に立つものと、しみじみ思いました。

万物が流転するように、卒業してから30年余りの時が過ぎ、巡り巡って弘前大学と、改めて向き合う機会をいただいたような気がしております。

これまではずっと、弘前大学の先生方に助けていただいていたが、これからは自分に何ができるかをしっかりと考え、母校と学生のために微力ではありますが、貢献できるように頑張りたいと思います。

### 医学部医学科通信



医学部附属病院長  
袴田 健一  
(昭和60年 医学部卒)

2023年4月から医学部附属病院長に就任した袴田健一と申します。

医学研究科は、2022年に文部科学省・JST「共創の場形成支援プログラム(COINEXT)」の拠点として採択され、新生COINEXT拠点として健康ビクデータを活用した研究活動を展開しています。2023年10月には「弘前大学COINEXT Well-being イノベーションフォーラム2023」を一橋講堂（東京都）で開催し、2024年2月には弘前市での開催が予定されています。また、2022年に文部科学省「ポストコロナ時代の医療人材養成拠点形成事業」に採択された「多職種連携とDX技術で融合した北東北が創出する地域医療教育コモンズ」事業では、秋田大学医学部、弘前学院大学および弘前医療福祉大学と連携し、総合的に患者・地域住民

を診る資質・能力を持つ医療者の育成を目指して活動を展開しています。2023年には弘前市で2回のシンポジウムが開催され、各大学の医療人材育成の取り組みが共有されています。

一方、医学部附属病院では、2023年3月末に新病棟（入院棟東）が竣工し、7月18日から運用が開始されています。個室の数や面積も増えて、患者・医療者双方にとって診療環境が飛躍的に向上しました。AIを活用した内視鏡診療機器やスマート調理システムなどの先進的設備も導入しています。さらに、感染症初療室と感染症病床の設置、免震構造基礎の採用、自家発電設備の整備など、今後発生が想定される新興感染症や大規模災害に対する附属病院全体のレジリエンスが向上いたしました。

2024年4月に迫った医師の働き方改革への対応、病床利用の促進や医療職不足への対応、DX推進、経営基盤の強化などの課題も山積していますが、教職員一丸となって課題解決への取り組みを加速しています。

